



|New Welfare|

AIではできない新しい福祉のカタチ 叶え合う支援をどう見てる？

久留米市ではじまった新しい福祉の形「叶え合う支援」。この事業に携わっている久留米市地域福祉課と久留米 AU-formal 実行委員会とで座談会を開催。「叶え合う支援」とは何か？これまでの経緯やそれぞれの立場から感じることを本音で話してもらいました。

暮らしの中の当たり前にしたい

久留米 AU-formal 実行委員会 代表 中村 路子
人口減少社会の中、いろんな人たちが関わりあう地域共生社会になることは日本全体の課題です。私たちも、年齢や性別関係なくつながるには、どんなプラットフォームが必要かをみんなで考えて、さまざまな場をつくりました。

その一つに、心の中にあるロマン（理想や大切にしていること）を語り合うことで、人との関わりを広げ深める企画がありました。ロマンを自然体で語れる街って素敵じゃないですか。その場を運営する中で「福祉って、かわいそうな人を支援するというイメージがある」「役割やメリットがないと何もしない」という人の多さに気づきました。けれど、本来は「あの人の情熱を聞いて感動したから仲良くなりたい」というような、人としての感覚を大事にしながらかんがねることが必要だと思いました。

行政と市民活動団体では、支援の優先順位や価値観が違います。制度やサービスで暮らしを守ることはこれからは必要。それに加えて、人としての感覚に基づいた「叶え合う支援」を皆さんの暮らしの中に当たり前にある状態にしていきたいです。そのためにも、市役所や社会福祉協議会、そしていろんな支援機関と一緒に取り組んでいきたいと思っています。

人としての感覚を大事にして関わり合う



着席者が対談メンバー 左から 永田さん（市）、中村さん（AU）、畠中さん（AU）、和泉さん（市）、藤野さん（AU）、淵上さん（市）、

高橋さん（AU）、松石さん（市）。テレビモニター周りが本誌編集チーム。左から 月田、甲斐、佐々木、池田